

## 源頼朝と京都の真言高僧

— 俊証・覚成・勝賢 —

平 雅 行

### はじめに

本稿は、源頼朝の要請によって祈禱を行った京都の真言高僧について検討する。

鎌倉幕府の宗教政策の実態と、その歴史的变化を探ることは、中世における国家と宗教との関係を考える上においても、また鎌倉幕府の研究を進める上においても、重要な基礎作業となるはずだ。そこで私は、鎌倉幕府と関わった個々の僧侶の事蹟を復元することによって、この課題に迫ろうと考えた。そして、これまで鎌倉山門派・鎌倉寺門派の成立・展開過程について検討を加え、鎌倉真言派についてもいくつかの論考を発表してきた。<sup>(1)</sup> 本稿はその研究の一環である。

さて、源頼朝が祈禱を依頼した東密の高僧には、俊証・覚成・勝賢の三名がいる。前二者は文治五年

(二一八九)八月に奥州征討の祈禱を命じられたし、勝賢は建久五年(一一九四)に永福寺薬師堂供養の導師に請定された。ところが奥州征討については、頼朝と後白河院との間で意見対立があつた。その齟齬が奥州征討祈禱にどのような影響を及ぼしたか、それを考察するのが本稿の第一の課題である。

ところで、頼朝が奥州征討祈禱を命じた時点の東寺長者は、俊証が一長者、勝賢が二長者であつた。ところが頼朝は、なぜか勝賢に替えて、覚成に祈禱を依頼している。なぜ、勝賢を除外したのか、その理由を考えるのが第二の課題である。

勝賢は奥州征討祈禱からはずされたとはいえ、建久五年に鎌倉に招聘されている。供養の導師をつとめただけの一時的な滞在であつたが、勝賢の鎌倉請定がその後、どのような歴史的影響を及ぼしたか、それを考察するのが第三の課題である。

## 第一章 奥州藤原氏への調伏祈禱

### 第一節 俊証・覚成・勝賢の概観

まず、源頼朝が祈禱を依頼した三名について、事績を概観しておこう。

俊証僧正(一一〇六―九二)は、大納言源俊明の孫で、中務大輔能明の子である。公名は大輔。従兄弟の子に、嫡弟となつた俊遍と、のちに鶴岡八幡宮別当となる定豪がいる。保延三年(一一三七)に東寺の定額僧となつたのが史料的な初見であり、久安三年(一一四七)に仁和寺心蓮院で世豪から伝法灌頂をうけた。また、心蓮院を

相承している。応保元年（一一六二）十月に東寺小灌頂阿闍梨を勤仕し、その労で承安三年（一一七三）に権律師に補された。寿永元年（一一八二）には権少僧都に転じ、翌年には護持の労で法印に叙されている。文治元年（一一八五）八月に東寺二長者に補され、十二月に一長者定遍が没すると、俊証が一長者となった。文治三年には権僧正に任じられ、さらに文治五年に東大寺別当に補任。死没するまで一長者・東大寺別当の地位にあった。<sup>(2)</sup>『東宝記』等によれば、文治二年に空海の『三十帖策子』を西院不動堂に安置したが、御室守覚の要請で、大聖院の経藏に貸し渡すことになったという。また、建久元年（一一九〇）十月の東大寺の棟上げでは別当としてこれに臨んだし、建久二年には、後白河院と文覚―源頼朝の協力によって東寺灌頂院の修理を行った。そして、両界曼荼羅を新造し十二天屏風を新写させて、俊証が導師となって灌頂院供養を実施している。<sup>(3)</sup>

祈禱の面では、朝廷の依頼で文治元年十一月に源義経追討の五壇法脇壇を勤仕した。そして文治二年正月には後七日御修法阿闍梨に参じ、五月には祈雨のため神泉苑で孔雀経読経を行った。さらに十一月には義経追補の五壇法中壇をつとめ、十二月には後鳥羽天皇の護持僧に任じられている。文治四年の後七日御修法を勤修し、文治五年には興福寺南円堂の新仏開眼供養の導師をつとめ、建久元年十二月には天変祈禱のため北斗法を勤仕した。そしてこの間の文治五年八月に源頼朝の命で、前長者覚成とともに奥州藤原氏追討の調伏法を勤修している（後述）。付法の弟子は、俊遍・憲信・証尊など七名である。<sup>(4)</sup>

覚成大僧正（一一二六―九八）は左大臣藤原家忠の孫で、花山院中納言忠宗の子である。兄に太政大臣忠雅がおり、舎弟には『山槐記』の内大臣忠親がいる。公名は中納言。仁和寺保寿院永厳の入室の弟子であり、久安四年（一一四八）には高野御室覚法から伝法灌頂をうけた。仁和寺内供奉、同観音院阿闍梨を経て、長寛二年

(二一六四)に寛遍大僧正の譲りで法眼に叙された。承安二年(一一七二)には御室覚性の譲りで、また治承二年(一一七八)にも御室守覚の譲りで、それぞれ法印・大僧都に叙任されている。治承四年に三長者に加任されたが、文治元年(一一八五)に俊証が東寺長者に補されると、長者を辞した。文治五年には権僧正に任じられたうえ、奥州征討祈禱を行った勳賞で東寺二長者に復任し、後鳥羽天皇の護持僧となった。建久三年に俊証が死没すると東寺一長者・法務に補され、さらに建久七年には東大寺別当を兼任し、建久九年には大僧正に任じられている。<sup>(5)</sup>

覚成は「東寺真言之名匠」として名高く、『先徳略名口決』は「人覚」が覚成の略名であると記している。仁和寺御室守覚の信賴があつく、守覚は覚成から保寿院流を相承した。治承三年八月に朝廷が守覚に祈禱を要請したときには、守覚は何を修すべきか、覚成と相談している。<sup>(6)</sup>また、御室覚性・守覚の伝法灌頂の色衆に参じたし、孔雀経法では長寛三年(一一六五)の覚性、承安二年(一一七二)・建久三年(一一九二)の守覚の孔雀経法で、それぞれ伴僧をつとめた。『右記』によれば、腰に赤裳をまとった長け一丈余りの異形の巨人が稚児を拉致するところに覚成が出くわし、真言を念ずると、巨人は稚児を棄てて逃げ去った。こうした「奇異之功験」は数度に及び、「叡感勅使」が送られたこともあったという。事実かどうかはともかくとして、同時代の守覚が、このエピソードを書き記していることが重要である。覚成の験力は、その生前からすでに伝説化していた。

実際のところ、覚成については久寿二年(一一五五)の北斗供をはじめとして、膨大な修法の記録が残っている。まず、治承二年(一一七八)の建礼門院の御産(安德天皇誕生)では、五壇法の中壇と守覚の孔雀経法護摩壇を兼ねたし、建久六年(一一九五)宜秋門院の御産(春華門院誕生)でも、普賢延命法・不空罽索護摩や泥塔供養導師をつ

とめた。雨乞いでは、治承五年六月に神泉苑での孔雀経読経で勸賞を得ているし、建久元年七月にも神泉苑読経を行い、雷雨をもたらして賞をうけた。天変祈禱では、建久二年十一月に北斗七壇の中壇をつとめ、翌年十月には彗星祈禱で孔雀経法を勤修して勸賞をうけた。孔雀経法を修するには仁和寺御室の許可が必要であるだけに、御室守覚の信頼の深さを示している。病悩祈禱では、建久四年後鳥羽天皇の疱瘡で不空羅索法を勤修したし、建久二年の中宮(宜秋門院)の病悩、および建久四年の疱瘡では不空羅索供・不空羅索法を修した<sup>(8)</sup>。

特に重要なのは後七日御修法である。御修法阿闍梨の出仕は、養和二年(一一八二)、文治六年(一一九〇)、建久四年、建久六年、九年の七度に及んでおり突出している。『諸宗章疏録』によれば、著書に「金玉鈔」「三昧耶戒理界智界私記三帖」があったという。また、再建供養の次第を覚成が記した『広隆寺供養日記』(一一六五年)が伝存している。付法の弟子は隆遍・顕性など一〇名がいた<sup>(9)</sup>。

勝賢権僧正(一一三八〜九六)は藤原信西の子である。兄弟には興福寺の覚憲、東大寺の明遍、延暦寺の澄憲、念仏聖の円照がおり、甥には解脱貞慶や成賢・定範、聖覚・海恵など優秀な学僧が数多い。勝賢は中世小野流における最重要人物の一人であり、土谷恵氏をはじめ、多くの先行研究で取り上げられてきた。公名は侍従。仁和寺越中法印最源のもとに入室し、その後、醍醐寺三宝院実運に師事。保元三年に実運の配慮で権律師に補され、翌年実運から伝法灌頂をうけた。平治の乱に巻き込まれて配流となり、これを機に勝憲から勝賢に改名している。まもなく一門とともに復権して、永暦元年(一一六〇)に醍醐寺座主に補された。しかし、寺僧の不満により、応保二年(一一六二)醍醐寺を追われて高野山に籠居。そこで心覚と出会う。心覚はもともと園城寺の僧侶であったが、最勝会での論義に敗れて東密に転じ、『別尊雜記』をはじめ、膨大な著作を残した碩学で

ある。勝賢は心覚と互いに教え教えられながら、修学の日々を高野山で過ごした。やがて京都に戻り、仁安二年（一一六七）に権少僧都に任じられ、承安四年（一一七四）には権大僧都となっている。

治承二年（一一七八）に兄弟子の醍醐寺座主兼海が死没すると、勝賢が座主に還補され、元暦元年（一一八四）には権僧正、さらに文治三年（一一八七）東寺二長者に兼任された。建久三年（一一九二）に俊証（東寺一長者・東大寺別当）が亡くなると、覚成が一長者、そして勝賢が東大寺別当に任じられた。建久六年三月の東大寺供養は、後鳥羽天皇や源頼朝が出席した盛大なものであったが、導師と呪願を興福寺別当覚憲と東大寺別当勝賢の兄弟が勤仕している。<sup>(10)</sup>

醍醐寺の僧侶が東寺一長者に就任することは定海（在任一一三三～四五年）より途絶えており、東密では仁和寺系が優位であった。そのため、勝賢は権僧正・二長者・東大寺別当で終わったが、その活動と影響力は非常に大きい。

まず祈雨祈禱では、治承五年（一一八二）六月の醍醐寺祈雨読経で勲賞を得たし、文治五年（一一八九）七月には神泉苑の祈雨読経で甘雨をもたらした。特に建久二年（一一九二）五月には後白河の要請と守覚の了解のもとで、醍醐寺僧としては違例の孔雀経法を勤修し、醍醐清瀧宮に阿闍梨五口が認められている。建久四年七月の醍醐寺孔雀経読経でも甘雨があり天感を得た。後七日御修法阿闍梨は、文治五年と建久三年の二度つとめている。また、以仁王の挙兵計画が発覚した治承四年五月には、高倉上皇御所で五壇法脇壇を修し、寿永二年（一一八三）九月には天下泰平のための転法輪法を勤仕した（後述）。建久二年六月には三合厄の不動法を修している。<sup>(11)</sup>

このほか、元暦二年（一一八五）八月に守覚法親王が地震鎮撫の孔雀経法を行ったときには、護摩壇阿闍梨を

つとめた。権僧正の身で護摩壇阿闍梨に参仕するのは違例であったが、この祈りによって地震が止んだとされ、守覚と勝賢が別々に勸賞をもらった。護摩壇阿闍梨への勸賞の別立は、前例のないことである。また、建久四年には重源の要請により、伊勢の天覚寺で曼荼羅供の導師をつとめた。<sup>(12)</sup> こうしたなかで、建久五年十二月、永福寺薬師堂の供養の導師として頼朝から鎌倉に招かれている(後述)。「寿永二年転法輪法記」「雨言雜秘記」をはじめ「駄都修法記」「如法尊勝鈔」「孔雀經記」「太元鈔」など膨大な著書を残しており、勝賢と守覚・心覚との受法関係については、土谷恵氏の詳細な研究がある。<sup>(13)</sup> 灌頂の資は成賢・定範・成宝・実賢・守覚など一九名にのぼった。

以上、三名の真言僧の経歴を概観してきた。これを踏まえて具体的な検討に入ろう。

## 第二節 奥州征討祈禱と源頼朝・後白河院

文治五年(一一八九)の頼朝の祈禱命令について、『東寺長者補任』俊証・覚成の項は次のように記している。<sup>(14)</sup>

〔俊証の項〕八月依「頼朝之命」、陸奥国御館秀衡(父太郎)、泰衡(母太郎)、為<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>討<sub>レ</sub>之、被<sub>レ</sub>行<sub>三</sub>調伏法<sub>一</sub>、

九月日両御館被<sub>レ</sub>討畢(頼朝沙汰也)、前長<sup>(者脱)</sup>覚成同修<sub>レ</sub>之、各勸賞、十月廿六日、以<sub>三</sub>証尊<sub>一</sub>申<sub>三</sub>任權律師<sub>一</sub>、

覚成者復<sub>三</sub>任長者<sub>一</sub>畢、

〔覚成の項〕十月廿六日復<sub>三</sub>任二長者<sub>一</sub>(六十四)、泰衡追討御祈賞、

『仁和寺諸院家記』『仁和寺諸師年譜』はともに、覚成の東寺二長者への復任を文治五年十月二十六日としており、『長者補任』の記事と一致する。『五八代記』も、十月二十六日に覚成が長者に還補されたため、勝賢が

三長者に降格となったと記している。<sup>(15)</sup> 勸賞は文治五年十月二十六日であったと確定してよい。

注意すべきは、奥州藤原氏の調伏祈禱は「頼朝之命」によって行われたが、二人に対する勸賞を朝廷が実施したことである。一般に親王將軍が登場するまでは、幕府祈禱は公請と認定されていない。そのため祈禱僧に對しては、幕府が謝礼（布施）を与えるだけで、朝廷が勸賞を施すことはなかった。<sup>(16)</sup> なぜ、二人は勸賞されたのか。今回の祈禱における頼朝の命令と、朝廷の勸賞とのギャップの背後には、奥州征討をめぐる後白河と頼朝との軋轢が存していた。

奥州征討によって源頼朝が、源氏の嫡流であることを演出しながら、新たな御家人制の創出をはかったことについては、川合康氏のすぐれた研究がある。<sup>(17)</sup> それをもとに、改めて経緯を概観しておこう。

源義経が奥州に潜伏していたことが文治四年二月に発覚し、朝廷は藤原泰衡に義経の捕縛命令を出した。九月には朝廷の使いを奥州に派遣し、十月にも追捕を命じる宣旨を下している。一方、頼朝は文治五年二月、全国の御家人に對し「七月十日までに鎌倉に參陣せよ」と命じて攻撃準備を整える一方、朝廷に對し、源義経・藤原泰衡を追討する宣旨の発給を求めた。これを察知した藤原泰衡は、閏四月、義経を襲撃して自害に追い込んだ。朝廷はこれで問題解決と安堵したが、頼朝の姿勢は変わらない。頼朝にとって義経は口実にすぎない。そして六月、頼朝は改めて奥州征討の宣旨を発するよう求めた。朝廷はそれに応じなかったが、動員をかけた軍勢が全国から続々と鎌倉に參集しており、ついに頼朝は七月十九日、宣旨のないまま奥州に進發した。そして八月八日～十日の阿津賀志山合戦で大勢を決し、多賀国府、そして平泉に入り、厨川まで北上して九月六日に藤原泰衡の首を得た。そこで頼朝は、九月十八日、征討の経緯を説明するとともに、宣旨なき追討を強行し



たことについて、後白河院への取りなしを吉田経房に依頼し、十月二十四日に鎌倉に帰還している。

以上の経緯に、同年八月の調伏祈禱を重ねると、朝廷の了解のないまま、頼朝の直接命令によってこの調伏が実施されたことが浮かび上がってくる。実際、頼朝は六月二十九日、武蔵の慈光寺に愛染王像を贈って奥州征討の祈禱を命じ、七月十八日には伊豆山の専光房良暹を呼んで、征討祈禱を求めるとともに、十九日の進発から二〇日後の合戦の日にあわせて、頼朝邸の後山に堂（頼朝法華堂）を造立するよう命じている。<sup>(18)</sup>つまり頼朝は、阿津賀志山合戦が八月八日ごろに行われることを当初より見込んでおり、それに向けて祈禱体制を構築していたのだ。俊証・覚成にも奥州進発前に、八月八日の合戦に向けて調伏祈禱を命じたと考えられる。つまりこの祈禱は、奥州征討と同様に、朝廷の了解なく頼朝の独断によって命じられた。

一方、後白河院は、当初こそ頼朝の独断専行に困惑したが、九月九日には頼朝に、泰衡追討の旨を届けている。戦闘の推移をみて、征討の追認に踏み切って関係修復を図ったのだ。さらに十月二十四日、頼朝とその配下への恩賞を打診した。それに対し頼朝は、十一月七日に大江広元を京都に派遣し、①頼朝への勲賞は辞退する、②部下については配慮を求める旨を返答している。<sup>(19)</sup>

以上の経緯からすれば、十月二十六日に朝廷が俊証・覚成に勲賞を与えたのは、頼朝との関係修復をはかる後白河の施策の一環と言えるだろう。つまり奥州征討と同様に、俊証・覚成への祈禱命令は源頼朝の独断であったが、朝廷はいずれもそれを追認した。頼朝の私戦・私請が朝廷から公的に認知されたのだ。俊証・覚成の調伏祈禱とその勲賞の間には、頼朝―後白河の亀裂とその修復過程が存していた。

## 第二章 勝賢と後白河院

次に検討すべきは、この調伏祈禱の人選である。この時の東寺長者は、一長者が俊証、二長者が勝賢であった。ところが頼朝は俊証・勝賢ではなく、勝賢に替えて覚成を指名した。この人選には、選択的意図が働いている。しかも俊証・覚成は広沢流、勝賢は小野流であるので、俊証・覚成の組み合わせよりも、俊証・勝賢の方がバランスがよい。にもかかわらず頼朝は、勝賢ではなく覚成を選んだ。その理由は何なのか。

先述したように、源頼朝は建久五年（一一九四）永福寺薬師堂供養の導師として勝賢を請定しており、勝賢に意趣があつたわけではない。確かに覚成は、「東寺真言之名匠」として高い評価をうけていた。<sup>(20)</sup>しかし、勝賢の名声もそれに劣るものではない。頼朝はなぜ勝賢を除外したのか。

勝賢について特徴的なことは、後白河院との親密さが際立っていることだ。ここでそれを確認しておこう。

まず第一に、寿永二年（一一八三）九月十二日、勝賢は後白河の要請で転法輪法を修した。横内裕人氏が明らかにしたように、これは木曾義仲に対する調伏祈禱でもあった。<sup>(21)</sup>同年七月二十五日に平家が都落ちし、二十八日に義仲が入京した。ところが、後白河が安徳天皇に替えて尊成親王（後鳥羽天皇を即位させようとしたのに対し、木曾義仲は以仁王の遺児北陸宮を強硬に推した。また、源行家・義仲らの混成軍団は統制がとれておらず、京中で濫妨・狼藉を繰り返したため、九月初めには義仲への不満があらわとなり、代わって源頼朝への期待が高まった。こうした中で後白河は頼朝との交渉を進める一方、九月十九日、義仲に対し平家追討に向かうよう命

じた。それに従って義仲が出京したところ、十月十四日、朝廷は寿永二年十月宣旨を発して源頼朝の東国支配権を容認した。反乱軍として出発した頼朝の軍隊は、これ以降、朝廷の政治体制のなかに組み込まれることになる。

こういう経緯のなか、九月九日に後白河は、「天下泰平・四海安穩」のために転法輪法を修すよう勝賢に命じ、勝賢は九月十二日から十月十七日までそれを勤仕した。転法輪法は呪咀調伏の代表的な修法である。平家追討を建前としているが、横内氏が指摘するように、本当は義仲に対する調伏であった。実際、後白河院は修法の直前に、勝賢に対し直接「仰<sup>(22)</sup>含御願趣」めている。平家追討のためであれば、その目的を秘密裏に「仰含」める必要はない。公にできるものでなかったために、後白河はじきじきその趣旨を「仰含」めたのだ。しかも『醍醐雜事記』は、この「法驗」で義仲が出陣して京都の治安がよくなった、との風聞を記している。<sup>(23)</sup>

さらに後白河は十一月十日から十六日まで蓮華王院で百壇大威徳供を行わせたが、『覚禪鈔』はこの「法驗」として義仲の滅亡と平家の敗北をあげている。これまた平家と義仲への調伏を目的としていた。この修法は山門・寺門・東密の密教僧が動員され、東寺分三六壇には御室守覚や東寺一長者定遍・醍醐座主勝賢らが参仕した。勝賢は自身と弟子で五壇を担当したが、<sup>(24)</sup>これには覚成も俊証も参加していない。覚成・俊証に比べれば、勝賢に対する後白河院の信頼は拔きんでており、勝賢もその信頼に応えようとした。大威徳供直後の十一月十九日に法住寺合戦がおこり、木曾義仲によって後白河の近臣が討たれ、後白河も幽閉された。勝賢はその「心勞」のあまり、翌年正月元旦、上醍醐の自坊(覚洞院)に籠もったまま醍醐座主朝拝の儀を欠席している。<sup>(25)</sup>後白河に対する勝賢の思いの深さがうかがわれる。

第二に、勝賢は後白河院より、鳥羽勝光明院の如意宝珠を預けられた。<sup>(26)</sup>一般に如意宝珠は仏舍利とほぼ同一視されていたが、宝珠は人為的に製作されることもあった。これを能作性宝珠という。勝賢が預けられた如意宝珠の由来については諸説があるが、範俊が白河院に進呈し、それを相承した鳥羽院が鳥羽離宮の勝光明院宝蔵に安置し、宝珠を離宮から出してはいけなと定め置いた。この如意宝珠を後白河が勝賢に預けたのだ。『玉葉』（国書刊行会編）建久三年四月八日条は、次のように記す。

而此法皇御時、去寿永之比、九郎義経欲<sub>レ</sub>奉<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>法皇之時、勝賢僧正奏<sub>二</sub>事由<sub>一</sub>、申<sub>二</sub>出彼珠<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>件法<sub>一</sub>、果以無為、其後依<sub>二</sub>院宣<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>長日御祈<sub>一</sub>、去年祈雨之時、即以<sub>二</sub>此珠<sub>一</sub>安<sub>二</sub>壇上<sub>一</sub>、果以有<sub>二</sub>功驗<sub>一</sub>、今度御惱之時、同修<sub>レ</sub>之、頗雖<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>始終之靈驗<sub>一</sub>、早速結願、仍御終焉之時、不<sub>レ</sub>修也、然而依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>七日御祈<sub>一</sub>、猶不<sub>二</sub>返納<sub>一</sub>、大略如<sub>二</sub>私物<sub>一</sub>也、不<sub>二</sub>返上<sub>一</sub>、遂以崩御、

これは後白河院が死没して一ヶ月後に、関白九条兼実が、如意宝珠の返納を勝賢に命じたことに関わる記事である。これによれば、①源義経が後白河院を拉致しようとした「寿永」のころ、勝賢が申請して宝珠を預かって如意宝珠法を勤仕し、そのおかげで法皇は無事だった。②その後、後白河は勝賢に長日祈禱を命じた。③建久二年五月の祈雨の孔雀経法では、勝賢が壇上に如意宝珠を安置して祈禱したため、大雨が降る功驗があった。④今回建久二年閏十二月以降の後白河院の病悩でも如意宝珠法を勤修したが、功驗がなかったため早々に結願し、臨終の時（建久三年三月十三日）も如意宝珠法を修さなかった。⑤建久三年正月の後七日御修法の後も、勝賢は如意宝珠を返納せず、勝賢の私物のようになったままだ、と兼実が述べている。同じく九条兼実が記した『勝光明院宝蔵宝珠管目録案』<sup>(27)</sup>によれば、

去元暦之比、大夫尉源義顕謀反之時、醍醐座主権僧正勝賢奉<sub>二</sub>法皇詔<sub>一</sub>、賜<sub>二</sub>件宝珠<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>本寺<sub>一</sub>勤<sub>二</sub>仕御祈<sub>一</sub>、其後不<sub>二</sub>返納<sub>一</sub>、遂以崩御、

とあり、源義経が謀反を起こした「元暦」のころ、勝賢が後白河の命によって、如意宝珠を給わって醍醐寺で御願を勤修したまま、如意宝珠を返さなかった、とする。『明月記』（冷泉家時雨亭叢書）建久三年四月八日条は

而法皇御時、義顕事時、以<sub>二</sub>勝賢僧正<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>件珠<sub>一</sub>為<sub>二</sub>本尊<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>如意<sub>一</sub>、法<sub>一</sub>、其事嚴重無為、仍年来預<sub>二</sub>給件僧正<sub>一</sub>、去冬又有<sub>二</sub>此法<sub>一</sub>、而正月七日結願了云々、

と記し、①源義経問題の時に後白河法皇が勝賢に鳥羽の宝珠を本尊として如意宝珠法を行わせたところ、その功験により法皇が無事だった、②そこでその宝珠を長年勝賢に預け、昨年冬にも如意宝珠法を修して、建久三年正月七日に結願した、と述べている。ところが、『古記』（高橋秀樹編）建久三年四月二十四日条は、藤原光綱の話として、次のように記している。

鳥羽院御時、被<sub>レ</sub>預<sub>二</sub>家成卿<sub>一</sub>、彼卿逝去之時、<sup>（藤原）</sup>降季卿被<sub>レ</sub>責召、但不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>鳥羽北門<sub>一</sub>之由、有<sub>二</sub>鳥羽院御起請文<sub>一</sub>、故院義仲乱之時、令<sub>二</sub>取出<sub>一</sub>給、以<sub>二</sub>勝賢僧正<sub>一</sub>被<sub>レ</sub>供<sub>レ</sub>之、有<sub>二</sub>証利<sub>一</sub>、其後被<sub>レ</sub>預<sub>二</sub>勝賢許<sub>一</sub>、

つまり、木曾義仲の乱の時に、後白河が鳥羽院の起請を無視して宝珠を取り出させ、勝賢に祈らせたと、功験があったので、その後も勝賢に宝珠を預けておいた、という。

話を整理すると、如意宝珠を預けた発端について、『玉葉』は「寿永之比」に源義経が法皇を拉致しようとしたとし、『勝光明院宝藏宝珠管目録案』は「元暦之比」の義経（義顕）謀反の時とする。『明月記』は時期を示さないものの、同じく義経からの護持とする。一方『古記』は、「義仲乱之時」のことだという。勝賢が修し

た如意宝珠法が義経に対するものなのか、それとも義仲に関わるものであったのか、記事に食い違いがある。

事実の問題として、これが源義経に関わるのであれば、文治元年（一一八五）十月、源頼朝との対立が決定的となった義経が、後白河院や後鳥羽天皇を奉じて西海・北陸に逃れようとした事件を指すだろう。<sup>(28)</sup> また「義仲乱之時」であれば、寿永二年（一一八三）十一月の法住寺合戦後に木曾義仲が後白河院を幽閉したことや、同年閏十月から翌年正月の敗死までの間、義仲が後白河を具して西海・北陸・近江に向かおうとしたことが、それに該当しよう。<sup>(29)</sup>

ただし、『玉葉』は「寿永之比」とするが、寿永は一一八二年五月二十七日～八四年四月十五日までなので、文治元年（一一八五）十月の義経は時期が合わない。同じ兼実が記した『勝光明院宝蔵宝珠筥目録案』は「寿永之比」を「元暦之比」（一一八四年四月十六日～八五年八月十三日）に改めており、これであれば源義経としても何とか説明が可能だ。また『吉記』のいう「義仲乱之時」については、勝賢が後白河の要請により単独で転法輪法を修したことからして十分な蓋然性があるし、『玉葉』の「寿永之比」が、義経と義仲を取り違えた可能性もある。勝賢が如意宝珠法を修したのは、寿永の義仲の乱なのか、それとも文治の義経の乱なのか。

ところで伊藤聡氏は、この如意宝珠について検討を加え、次のように結論した。<sup>(30)</sup> ①鳥羽宝蔵に納められていた宝珠は、範俊が作製したものである、②文治元年八月に、勝賢は自分が作製した宝珠を東大寺大仏に奉納した、③勝賢は大仏に奉納する宝珠を製作するため、鳥羽宝蔵の宝珠の封を解いてその製法を調べた。

伊藤説によれば、勝賢は文治元年八月には、鳥羽宝蔵の宝珠をすでに手に入れていたことになる。義経が後白河を拉致して鎮西に逃れる計画が浮上するのは、それから二ヶ月後のことである。八月段階では、義経と頼

朝との関係は厳しくなっていたものの、まだ破断していない。義経から後白河を護るために、文治元年八月以前に勝賢が鳥羽の宝珠を授けられたというのは、時間的経過からして無理がある。となれば「義仲乱之時」ということになる。

寿永二年（一一八三）十一月十九日の法住寺合戦から、翌年正月二十日に義仲が討ち死にするまで、後白河は義仲のもとで、深刻な状況に追い込まれていた。局面によっては義仲が、後白河院を西海や北陸・近江に供奉・連行する危険性も十分にあった。それゆえ、勝賢は後白河の内意により、鳥羽の宝珠を受領して、醍醐の自坊で玉体安穩の如意宝珠法を修したのであろう。先述の転法輪法の勤修からすれば、後白河が勝賢だけに、義仲からの護持祈禱を命じたとしても不思議ではない。しかも勝賢は、後白河への「心労」のため、自坊に籠もったまま寿永三年正月元旦の醍醐寺朝拝を欠席している。想像を逞しくすれば、これは勝賢が如意宝珠法の勤修に専念していたためとも考えられる。

以上からすれば勝賢は、寿永二年末に後白河院の意をうけて如意宝珠法を修し、義仲の危機から後白河を護りぬいた、と結論してよからう。そして勝賢はその功で宝珠を預けられて長日の如意宝珠法を勤仕したし、やがてこの宝珠をもとに、新たな宝珠を製作して、文治元年八月、それを東大寺大仏に奉納したのである。さらに言う、如意宝珠法が後白河院を義仲の危機から救ったのであれば、文治元年十月の義経の乱においても、当然、それが勤修されたはずである。諸史料が、義仲の乱か、義経の乱かで混乱した原因がここにある。鳥羽の如意宝珠は木曾義仲の乱をきっかけに勝賢に預けられたが、その功験は義仲・義経の乱の双方にわたったのである。

第三は東大寺東南院院主への就任である。東南院は治承四年（一一八〇）の南都焼き討ちによつて焼亡し、院主坊と経蔵が残っているだけであつた。ところが文治五年（一一八七）七月、院主であつた道慶大法師は、東南院を勝賢に譲る旨の書状を重源に送りつけて、そのまま高野山に出奔した。道慶は源有房の子で、東南院聖慶に師事して東南院を相承し、文治三年に十九歳で維摩会堅義を遂業しているので、道慶は二十一歳の若さで東南院を投げ出したことになる。これだけでも違例であるが、勝賢の院主就任も違例であつた。

これについては藤井恵介氏が検討を加えており、それを踏まえると、次のような問題点を指摘できる。<sup>(31)</sup>①歴代の東南院院主は、東南院に居住するのが通例であつたが、勝賢は東南院に住んでいないし、これまでも東南院とは関わりがなかつた。②歴代の東南院院主は終身その地位にあつたが、道慶は二十一歳の若さで辞任した。③醍醐座主による東南院院主の兼帯は、勝賢以降に増えるが、その前は天元三年（九八〇）に亡くなつた法縁までさかのぼる。つまり、醍醐寺座主勝賢による東南院の兼帯は二〇〇年ぶりのことである。

そして勝賢自身もこうした異常さを理解していた。一年後の文治六年・建久元年（一一八八）六月に勝賢が弟子の定範にこの院主職を譲るが、そこで次のように述べている。<sup>(32)</sup>

譲与 東南院々主事

在

堂舎僧房経蔵所領等（自余券契在別）

右件院家、去年七月不慮之外伝<sup>レ</sup>領之、偏是尊師御冥助也、仍為報<sup>レ</sup>祖師厚恩、院家造営、興法利人、殊抛<sup>二</sup>万事<sup>一</sup>所<sup>二</sup>相勵<sup>一</sup>也、而自<sup>二</sup>往古<sup>一</sup>三論之本所也、但密宗之身、猶院主号有<sup>二</sup>其憚<sup>一</sup>、故所<sup>レ</sup>讓<sup>二</sup>与<sup>一</sup>定範得業<sup>一</sup>也、



即常<sub>レ</sub>住本寺<sub>二</sub>而令<sub>レ</sub>学<sub>二</sub>本宗<sub>一</sub>也、自今以後、非<sub>二</sub>本寺常住人<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>居<sub>二</sub>此職<sub>一</sub>、深可<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>其旨<sub>一</sub>状、処分如<sub>レ</sub>件、

文治六年六月七日

権僧正〈在判〉

ここで勝賢は、①a 思いがけず東南院を伝領したが、それに応えるため「院家造営」に万事を投げすて励んできた、②b 東南院は三論宗の本所であり、唯密の私が院主を名乗るのは憚りがあるため、院主を定範に譲る、③c 今後は本寺に常住する者でなければ東南院院主となつてはならない、と述べている。中でも注意すべきは①aである。勝賢に対する違例の人事は、東南院の造営を進めるためであった。

そして実際、建久元年十月に東大寺大仏殿の上棟が行われるが、この上棟御幸では先例どおり、東南院が後白河法皇の御所に指定された。そのため、期日以前に東南院を造立するよう命がくだり、勝賢はわずか五〇日で、寝殿以下の壮麗な建物を完成させている。<sup>(33)</sup>勝賢に対する違例の人事が、東南院造立のためであったことは明らかである。そして藤井氏は、この人事の背後に重源と勝賢との親密さがあったと推測している。その想定は恐らく正しいのだろうが、それ以上に、勝賢に対する後白河院の信任の深さがこの人事をもたらしたと考えるべきであろう。

第四は室生寺仏舎利盗掘事件である。建久二年（一一八九）六月、重源の弟子である空体房鑑也が室生の仏舎利を盗掘し、興福寺大衆がそれに抗議する事件が起きた。そして東大寺再建中の重源が一時失踪する騒動まで起きている。後白河院は最終的にこれを不問に付したが、その決定過程に勝賢が重要な役割を果たした。この時の勝賢は東大寺別当ではなく、この問題については、直接的な利害関係のない第三者であった。その勝賢が

六月十七日、後白河院の御前議定に加わっている。参加者は摂政九条兼実と勝賢、それに内大臣藤原忠親らであった。その際、勝賢は空体の話が信用できないと主張した。実際、九条兼実が後に空体が提出した舍利・經文を仏巖上人にみせたところ、仏巖も偽物だと語っており、勝賢の判断は当然であったろう。ところが、後白河院はなぜか結論を先送りにし、改めて六月二十日に重源・空体を院御所に呼んだ。そして、空体所進の經文と未来記を勝賢に読ませて、その仏舍利を本物と認定した。つまり勝賢は、後白河の意向を汲んで空体の言い分を認め、後白河院はそれを根拠に、事件を不問に付して空体に院中祇候を許した。後白河院のこの決定は、東大寺再建に奔走する重源へのねぎらいを優先させたものであったが、その意を汲んで勝賢は、後白河の判断を正当化する役割を担ったのである。<sup>(34)</sup>

第五は筑後国一宮の高良社<sup>こうら</sup>についてである。内乱で荒廃した高良社に対し、勝賢は文治四年(一一八八)大般若經六百卷をはじめとする仏具・装束を寄進した。その施入状によれば、後白河院の恩顧によって勝賢が高良社の社務になったという。また社領である高良庄は、後白河院が本家職、勝賢が領家職を保持しており、この領家職はその後、醍醐寺三宝院によって相承された。ここにおいても、後白河院と勝賢との密接な関係がうかがえる。<sup>(35)</sup>

第六は後白河法皇の臨終である。後白河は建久三年(一一九二)三月に亡くなるが、その臨終の場に祇候していたのは、善知識の本成房湛敷<sup>(生)</sup>と御室守覚、そして勝賢の三人だけであった。<sup>(36)</sup>守覚と勝賢の二人は後白河の臨終まで病悩祈禱に携わるとともに、最後は後白河の死を看取った。守覚が後白河の子であったことからすれば、善知識でない勝賢が臨終の場にいたことは、後白河との親密さを象徴的に示している。また葬送の御前僧

一三名の筆頭に、勝賢の名が挙がっている。<sup>(37)</sup> 後白河にとって勝賢は特別な存在であった。

以上みてきたように、後白河と勝賢とはきわめて親密であった。この信頼のあつさは、勝賢の能力に一因があるが、他方では、勝賢が後白河の側近藤原信西の子であったことが影響している。しかも土谷恵氏によれば、勝賢の母は成範・脩範（しけのり）と同様に紀伊二位藤原朝子であり、彼女は後白河院の乳母である。つまり、勝賢・成範・脩範の兄弟は、後白河院と乳母子の関係にあった。<sup>(38)</sup> 一般に乳母子は主人とのつながりが非常に強いが、<sup>(39)</sup> そのことは後白河院と勝賢との関係についても言えるだろう。

そして、後白河との緊密な関係は、勝賢の経歴の当初から確認できる。醍醐寺座主職をめぐり、勝賢は後白河院と運命をともにして、二度失脚し二度復活した。『醍醐寺座主讓補次第』や『鈔第六（無名抄）』奥書等をもとに、その経緯を確認しておこう。<sup>(40)</sup>

醍醐座主実運は勝賢に座主職を譲るべく、保元三年（一一五八）十二月に少僧都を辞して勝賢を権律師に補し、翌年四月に伝法灌頂を授けた。これまで醍醐寺座主は勝覚―定海―元海―実運と、源師房子孫による同族師資間で相続されており、土谷恵氏がいうように、<sup>(41)</sup> 実運から勝賢への違例の相承は後白河の介入と考えるとよからう。ところが、平治の乱によってそれが反故となる。平治元年（一一五九）十二月九日に藤原信頼一派が院御所を襲撃し、後白河院の身柄を確保した。そして信西を自害に追い込むとともに、信西の子息を捕縛し、十二月二十二日に勝賢たちを配流した。それに対し平清盛は、二条天皇を自邸に迎えて二十六日に藤原信頼を討ち取る。これによりその後の政局は、二条親政派の藤原経宗・惟方が主導することになった。一方、座主実運は体調が悪化したため、永暦元年（一一六〇）二月、醍醐寺座主職を一族の乗海に譲った。そして、二月十九日に奏

聞を経て相承の了解を得ている(二月二十四日実運没)。この奏聞は二条天皇への奏聞と考えてよい。ところが、正式の手続きが行われる直前の二月二十日、後白河院が清盛に命じて藤原経宗・惟方を捕縛して流罪に処し、二十二日には信西の子息を赦免した。後白河院が巻き返したのである。これによって乗海への座主宣下は白紙に戻され、同年五月一日、勝賢が二十三歳の若さで醍醐寺座主に補任された。

ところが、応保元年(一二六二)九月、憲仁親王(高倉天皇)立太子の陰謀が発覚して、後白河の政治介入が停止される。すると、勝賢に対する不満が寺僧から噴出し、翌年四月、座主職が停廃され勝賢は高野山に逐電した。後白河院が勝賢を強引に醍醐座主に押し込んだ以上、院の後ろ盾がなくなれば、若い勝賢が失脚するのは必然である。しかし、永万二年(一一六五)七月に二条天皇が早世する。これを機に後白河院が政治の主導権を回復し、まもなく勝賢は京都に戻って公請に従事するようになった。

このように、勝賢の最初の醍醐座主就任と辞任の顛末は、後白河院の力の盛衰と直結していた。<sup>(42)</sup> しかも、治承三年(一一七九)十一月の平清盛のクーデターで後白河が幽閉されたとき、院御所への出入りを許されたのは、数名の女房を除けば、藤原成範・脩範(勝賢の同母兄弟)と法勝寺執行静賢(勝賢の異母兄)だけであったように、<sup>(43)</sup> 信西の子弟はその後においても後白河院の側近であった。成範・脩範・静賢・勝賢の兄弟は、聖俗両界にわたって後白河を支えたのである。

以上からすれば、源頼朝が奥州征討の調伏祈禱を勝賢に依頼しなかった理由は、明らかであろう。奥州征討は後白河院の了解なしに頼朝が強行した。それだけに、後白河院と緊密な関係にあった勝賢は、頼朝が征討祈禱を命じたとしても、承諾しなかったであろう。勝賢が祈禱を拒否したのか、それとも後白河との関係を考慮

して依頼を憚ったのかは不明であるが、ともかく奥州征討にかかわる後白河院との確執を背景にして、源頼朝は勝賢ではなく、俊証・覚成に調伏祈禱を命じたのである。

### 第三章 源頼朝と勝賢

勝賢は文治五年（一一八九）の奥州征討祈禱から除外されたが、源頼朝は建久五年（一一九四）十二月の永福寺薬師堂供養に勝賢を招いた。鎌倉に到着した勝賢は八田知家邸に迎えられ、十二月二十六日、供養の導師をつとめている。<sup>(4)</sup>『吾妻鏡』によれば、勝賢に与えられた布施は、次のとおりである。

導師布施 錦被物三重、綾被物七十重、綾百端、長絹百疋、染絹三百端、白布千端

加布施 金作剣一腰、香呂箱（以「綾紫絹等」作之）

此外 馬二十疋、供米三百石

このように莫大な布施が、勝賢に贈られた。また、建久六年三月の東大寺供養に源頼朝が参列しているので、頼朝はこの折りにも東大寺別当勝賢と会っているはずである。

さて、頼朝による勝賢の招聘は、新たな展開をみせることになる。その歴史的影響を確認しておこう。第一は、勝賢による幕府祈禱である。建武四年（一一三七）醍醐寺報恩院は、

当流祖師勝賢僧正坊、右大将家御時、蒙「貴命」致「懇祈」以降、成賢・憲深・実深・覚雅・憲淳・隆勝・隆舜、鎮拙「鄭重之丹精」、送「数廻之炎凉」畢、云「公家」云「武家」、御祈願由緒異「于他」者哉、

と述べ、勝賢が頼朝から祈禱命令をうけ、それ以後、成賢・憲深・実深・寛雅・憲淳・隆勝・隆舜の八代にわたって公武祈禱に従事してきた、と語っている。また、元亨二年（一三三二）に隆舜は次のように訴えた。<sup>(45)</sup>

（蓮藏院）

院家等者、為<sub>二</sub>当寺往代之聖舎、師資相承之古跡、祖師勝賢僧正管領之時、承<sub>二</sub>右大将家護持、参<sub>二</sub>向関東、之後、始<sub>二</sub>置長日不退勤行、奉<sub>レ</sub>祈<sub>二</sub>武家安全、以降、季嚴・教嚴・実深・寛雅等相<sub>二</sub>承之、（中略）爰隆舜、伝<sub>二</sub>最初勝賢僧正以下八代護持之芳躅、稟<sub>二</sub>憲淳・隆勝両師之嚴訓、究<sub>二</sub>一宗之奥旨、為<sub>二</sub>附法之嫡弟、帶<sub>二</sub>高祖伝来三国相承之重宝并秘仏・秘曼荼羅・秘書・道具・天下無双之靈宝等、賜<sub>二</sub>御教書、加<sub>二</sub>御祈禱人数、送<sub>二</sub>若干星霜、之条、護持之勤勞異<sub>レ</sub>他、誰人可<sub>二</sub>比肩<sub>一</sub>乎、

①蓮藏院は祖師の勝賢が、頼朝から護持の命をうけて鎌倉に参向してから「長日不退勤行」を行って「武家安全」を祈ってきた。②隆舜は「勝賢僧正以下八代護持之芳躅」をうけて護持祈禱に従事してきた、と述べている。

二つの記事は、勝賢―成賢―憲深―実深と勝賢―季嚴―教嚴―実深とのように、系譜に若干の違いがある。だが、勝賢嫡流である成賢―憲深の報恩院流と、勝賢傍流である季嚴―教嚴の蓮藏院流は、実深の段階で統合されるので、問題にするほどのことでもないだろう。このようにいずれの記事も、勝賢が頼朝から祈禱命令をうけ、それ以降、一門が八代にわたって幕府祈禱に携わってきたと記しており、彼らの幕府祈禱の始まりが頼朝による勝賢への依頼であったと述べている。

残念ながら、源頼朝が勝賢に護持祈禱を依頼した事実を裏づけることはできない。しかし、傍証することは可能だ。勝賢の嫡弟である成賢は建暦三年（一二三三）七月、鎌倉が和田合戦や大地震の余波にゆれるなか、大

内惟義の奉行によって「鎌倉御祈」を行った。憲深は寛元元年（一二四三）七月に鎌倉に赴いて明王院北斗堂で伝法灌頂をさずけたし、季厳・教厳・実深・覚雅は京都の六条八幡宮別当として幕府祈禱を担った。憲淳・隆勝・隆舜も関東長日祈禱に携わり、その相承の安堵状を北条貞時・高時から得ている。<sup>(46)</sup>これらの事実からして、勝賢が頼朝から祈禱命令をうけたとの記事も信頼してよいと思われる。そうでなければ、成賢以下が幕府祈禱に携わるようになった経緯の説明がつかない。恐らく永福寺供養に招聘した際、頼朝が勝賢に今後の幕府祈禱を依頼したのであろう。源頼朝による俊証・覚成に対する祈禱要請は、一度限りで終わったが、勝賢については、鎌倉末にいたるまで、勝賢とその弟子たちが関東の長日祈禱を継続したのである。

第二は、勝賢が季厳を弟子に迎えたことである。季厳は鎌倉幕府の重臣である大江広元の弟であり、六条八幡宮の別当である。六条八幡宮は御家人役によって造営されており、その点で、六条八幡は鎌倉の鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺・大慈寺、および伊豆の走湯山とならぶ鎌倉幕府の直轄寺院である。そして頼朝は、文治元年（一一八五）十二月に六条八幡宮の別当に季厳を補任し、その整備を進めさせた。<sup>(47)</sup>一方、勝賢の嫡弟である成賢は、承元三年（一二〇九）に勝賢の遺志を尊重して季厳に醍醐蓮藏院を譲っている。<sup>(48)</sup>このうち六条八幡宮別当の多くが蓮藏院を兼帯し、蓮藏院は京都における幕府祈禱の中心の一つとなった。

ところで関口崇史氏は、建久五年の永福寺薬師堂供養に勝賢が呼ばれた背景に、勝賢と季厳との師弟関係があったと推測している。<sup>(49)</sup>しかし、勝賢―季厳の師弟関係が導師招聘のきっかけになったのか、それとも供養への請定が二人に師弟関係を結ばせることになったのかについては、慎重な吟味が必要である。そしてそれを明らかにするには、まず、季厳がどのような師から受法していたのか、その全体像を把握しておかなければならな

い。

季嚴のような下級貴族出身者の師弟関係を説明するのは容易でないが、今のところ、季嚴の師として確認できる人物が四名いる。安祥寺座主実嚴と仁和寺の寛杲少納言阿闍梨、そして石山寺の文泉房朗澄と、勝賢である。<sup>(50)</sup> いずれも付法系統図に季嚴の名が出てくるだけで、季嚴への伝法灌頂にまつわる記事は存在しない。四名の師のうち、実嚴(一一三一―八五)は宗意の灌頂の資であり、安祥寺座主・法琳寺別当となった。治承五年(一一八二)七月には、関東調伏の太元帥法を勤修している。「安祥寺流血脉図」に実嚴の付法として「季嚴僧都」の名がみえるものの、『血脉類集記』と醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脉』にみえる実嚴の灌頂の資四名・一三名の中に季嚴は登場しない。<sup>(51)</sup> 季嚴の「嚴」は実嚴から授けられたと思われるが、伝法灌頂には至らなかったであろう。

寛杲は大炊御門経実の孫で、刑部大輔隆通の子である。生没年は定かでないが、仁和寺の僧侶で、仁平二年(一二五二)安楽寿院念仏の題名僧として登場するのが今のところ初見である。『血脉類集記』によれば、応保二年(一一六二)から承安二年(一一七二)まで宗範・御室覚性・禎喜らの色衆に参じ、『孔雀経御修法記』によれば、承安二年から治承四年(一一八〇)まで、禎喜・定遍の伴僧をつとめた。また、父の藤原隆通は肥後国鹿子木庄の立荘に奔走した人物であり、安元二年(一一七六)には寛杲が領家として預所を補任している。<sup>(52)</sup> 一方、朗澄(一二三二―一二〇九)は『石山寺縁起』に「中古の明匠」として登場する碩学であり、『石文抄』を著したほか、文治二年(一一八七)に石山座主公賢が範賢に伝法灌頂を授けた灌頂記を残している。また、朗澄は治承三年四月に勝賢の伝法灌頂の色衆に参仕し、建久七年(一一九六)五月には、死没直前の勝賢から許可灌頂を重受した。<sup>(53)</sup>



この寛杲・朗澄については、『血脈類集記』に付法系統図が掲載され、そこに季嚴の名がみえるが、この二人については彼らの伝法灌頂の記録そのものが残っていない。これ以上の解明は困難であり、季嚴は二人のどちらから伝法灌頂をうけた、と考えておきたい。ちなみに、寛杲は実嚴の弟子であり、寛杲と朗澄は共に大法房実任の弟子でもあった。<sup>(54)</sup> 恐らく季嚴の師は、実嚴―寛杲―朗澄の順であつたのだろう。

一方、勝賢との関係についてみると、「醍醐水本法流并院家相承次第」(一三八四年成立)に勝賢の弟子として「季嚴(蓮藏院僧都、若宮別当)」の名がみえる。ただし、『血脈類集記』と醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』は、勝賢から伝法灌頂をうけた者二〇名、一九名を挙げるが、いずれにも季嚴の名は見えない。『五八代記』は具支灌頂一九名、許可一名とし、『覚洞院僧正入壇資記』は朗澄の重受をふくめ二二名の入壇資を記すが、そこにも季嚴の名は確認できない。<sup>(55)</sup> 季嚴は勝賢の遺志によって醍醐蓮藏院を譲られたが、二人の間にさほど濃密な関係があつたわけではない。

その傍証となるのが、季嚴の公請活動である。勝賢は数多くの修法を行っており、それに扈從した伴僧が判明するが、そこに季嚴の名はみえない。たとえば季嚴は、文治三年(一一八七)十月と翌年正月に俊証の伝法灌頂と後七日御修法の伴僧をつとめ、建久十年(一一九〇)・正治二年(一一九一)・建仁三年(一一九三)には延杲の伴僧として後七日御修法に出仕しているが、勝賢が勤修した文治五年・建久三年の後七日御修法では、伴僧に季嚴の名がない。<sup>(56)</sup> 後七日御修法という真言僧の晴れ舞台ともいべき場で、季嚴は俊証・延杲の伴僧をつとめたが、勝賢の修法に参加していない。勝賢と季嚴との関係は想像以上に希薄である。

ただし、つながりが皆無というわけでもない。重源が醍醐寺に宋本一切経を寄進した建久六年十一月、およ

び一切経の経蔵が完成した建久九年三月に、それぞれ請僧百口で醍醐寺で供養が行われたが、そこに季厳は勝賢およびその一門と一緒に参仕している。また、正治二年八月の脩明門院の御産祈禱（雅成親王誕生）では、勝賢一門の範賢僧都らと七壇閻魔天供を修した。<sup>(57)</sup> このように季厳には、勝賢およびその一門と連携した活動もみえるが、これらはいずれも建久五年十二月の永福寺薬師堂供養の後のことである。つまり、永福寺供養の前までは、勝賢と季厳との間に特別な関係は存在しなかった。

以上からすれば、季厳が勝賢と関わりをもつようになったのは、永福寺供養の後であると結論してよからう。つまり、勝賢は季厳とのつながりで鎌倉に招聘されたのではない。

このころの源頼朝は、宗派バランスに配慮しながら鎌倉の仏教界を構築していた。鶴岡八幡宮の二十五供僧は、寺門一五口、山門五口、東密五口で三・一・一の割合であったし、京都から高僧を導師として招いたのも、寺門・山門・東密が三・一・一の割合であった。<sup>(58)</sup> 最後に呼ばれたのが東密の勝賢であるが、その際、頼朝は真言宗内のバランスも配慮したはずである。すでに頼朝は文治五年（一一八九）広沢流の大物二人に、奥州征討の祈禱を命じた。建久五年の永福寺薬師堂供養に東密僧を招くのであれば、小野流の重鎮勝賢を選ぶのは自然な選択である。

そして、この鎌倉招聘がきっかけとなって、勝賢は季厳と交流するようになる。恐らく、頼朝が依頼したのだろう。京都の六条八幡宮は、鎌倉の鶴岡八幡宮とならぶ幕府の宗教的拠点である。ところが別当の季厳は身分出自の低さもあって、密教の修学が十分でない。そのため頼朝は、季厳への配慮を勝賢に要請した。建久二年に頼朝は仁和寺御室守覚に対して、頼朝護持僧である性我への伝法灌頂を依頼している。<sup>(59)</sup> それと同様に、

季厳を弟子に加えるよう要請したのであろう。そしてそれに応えて勝賢は、嫡弟の成賢に醍醐蓮藏院を季厳に譲るように申し置いた。こうして六条八幡宮の別当は、このち小野流の僧侶によって相承されることになったのである。

## おわりに

最後に、本稿で明らかにしたことをまとめておこう。

(1) 文治五年（一一八九）八月の奥州調伏祈禱とその勦賞の間には、源頼朝と後白河院との対立と修復過程が存在していた。頼朝は奥州追討の宣旨のないまま出陣したが、戦闘の推移をみて、後白河院は征討を追認して頼朝との関係を修復しようとした。俊証・覚成は頼朝の要請で奥州藤原氏の調伏祈禱を行ったが、この段階では、後白河は奥州征討を認めていない。それゆえ、この調伏は源頼朝独自の命によってなされたが、後白河院はその後、奥州征討を追認した。その結果、俊証・覚成の祈禱は公請と認定され、朝廷は彼らに勦賞を与えた。

(2) 東寺二長者勝賢は、藤原信西と紀伊二位藤原朝子との間の子であり、後白河院とは乳母子の関係にある。それ故、勝賢と後白河との間には、以下のような濃密な関係が確認できる。

① 永暦元年（一一六〇）に勝賢は醍醐寺座主に補任されるが、当時の後白河院の政治的不安定さに規定されて、勝賢は座主就任前後で、二度失脚し二度復活した。

②寿永二年（一一八三）九月、勝賢は後白河のじきじきの要請で、平家と木曾義仲に対する調伏祈禱（転法輪法）を勤修した。

③寿永二年十一月の法住寺合戦後、後白河院は木曾義仲によって幽閉されるが、その際、勝賢は鳥羽勝光明院の宝珠を預けられて如意宝珠法を修し、義仲から後白河を護った。その後、勝賢は長日如意宝珠法の勤修を命じられ、文治元年十月の源義経の乱においても、勝賢が後白河院を護持した。

④建久元年（一一九〇）の東大寺大仏殿上棟への後白河御幸のため、勝賢が東大寺東南院の院主に補任されて、東南院に臨幸御所を造営した。

⑤建久二年六月、室生寺仏舎利盗掘事件に際し、勝賢は後白河の意を汲んで空体の言い分を認めた。そして後白河は、それを根拠にこの事件を不問に付した。

⑥勝賢は後白河院によって筑後一宮である高良社の社務に補任され、内乱で荒廃した高良社の整備を託された。

⑦建久三年三月、勝賢は守覚とともに後白河法皇の臨終に立ち会った。

(3) 源頼朝が奥州征討祈禱から東寺二長者勝賢をはずしたのは、勝賢が後白河院の側近中の側近であり、後白河が奥州征討に反対していたためである。

(4) 源頼朝は建久五年十二月、勝賢を京都から招いて永福寺薬師堂供養の導師を依頼した。これが契機となって二つのことが起きた。

①頼朝は勝賢に鎌倉幕府の長日護持祈禱を依頼した。これにより勝賢一門は、鎌倉末にいたるまで関東祈

禱に従事した。

② 頼朝は勝賢に六条八幡宮別当季厳に対する配慮を要請した。季厳はこれまで、実厳・寛呆・朗澄と師弟関係をむすんできたが、これにより季厳は勝賢の弟子となって醍醐蓮藏院を譲られた。こうして蓮藏院は、京都における幕府祈禱の中心の一つとなった。

鎌倉山門派・鎌倉寺門派に比べると、鎌倉真言派は関係資料が圧倒的に多く、その全体像の解明は容易でない。とはいえ、一步一步、ゴールを目指して着実にあゆんでゆきたい。

# 注

- (1) 主な論考は次のとおりである。拙稿「鎌倉山門派の成立と展開」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』四〇、二〇〇〇年)、同「鎌倉幕府の將軍祈禱に関する一史料」(『同』四七、二〇〇七年)、同「鎌倉寺門派の成立と展開」(『同』四九、二〇〇九年)、同「定豪と鎌倉幕府」(大阪大学文学部日本史研究室編『古代中世の社会と国家』清文堂、一九九八年)、同「鎌倉中期における鎌倉真言派の僧侶―良瑜・光宝・実賢―」(『待兼山論叢』史学篇四三、二〇〇九年)、同「鎌倉真言派と松殿法印―良基と静尊―」(『京都学園大学 人間文化研究』三五、二〇一五年)、同「熱田大宮司家の寛伝僧都と源頼朝―瀧山寺・日光山・高野大鐘―」(『同』三八、二〇一七年)、同「鎌倉真言派の成立―文覚・性我・走湯山―」(『同』四〇、二〇一八年)。

- (2) 『東寺長者補任』(『続々群書類従』第二、五六三頁)、『尊卑分脈』第三篇四七四頁、『血脈類集記』(『真言宗全書』三九卷一四六頁、『仁和寺諸院家記』(『群書類従』第四輯七〇三頁)

- (3) 『東宝記』(『続々群書類従』第一二、二九頁・五九頁)、建保五年正月六日東寺灌頂院曼荼羅供開眼勘文(鎌倉遺文・補遺七一六号)

- (4) 『五壇法日記』(『統群書類従』第二六輯上、七八頁)、『東寺長者補任』(『統々群書類従』第一、五六〇頁・五六二頁)、『玉葉』文治二年五月十二日条、文治五年九月二十八日条、建久元年十二月二十二日条、『門葉記』卷五三(『大正新脩大藏經 図像部』第一一卷四九五頁)。ほかにも『孔雀經御修法記』(『統群書類従』第二五輯下、三五九頁)、『観音院恒例結縁灌頂記』(『同』第二六輯上、五三二頁)、『文治三年三月六日後白河法皇院宣』(『鎌倉遺文』二二七号)などを参照。
- (5) 『東寺長者補任』(『統々群書類従』第二、五六六頁)、『尊卑分脈』第一篇二〇五頁、『血脈類集記』(『真言宗全書』三九卷一三九頁)、『仁和寺諸院家記』(『群書類従』第四輯七二頁)、『門葉記』卷五三(『大正新脩大藏經 図像部』第一一卷四九五頁)、『山槐記』保元三年九月七日条、『究竟僧綱任』(横内裕人『日本中世の仏教と東アジア』塙書房、二〇〇八年、一五九頁)
- (6) 『玉葉』文治二年四月十九日条、『先徳略名口決』(『統群書類従』第二八輯下、三八〇頁)、『北院御室拾要集』(『同』第二八輯下、二二頁)、『左記』(『群書類従』第二四輯六六六頁)
- (7) 『血脈類集記』(『真言宗全書』三九卷一三三頁・一四八頁)、『孔雀經御修法記』(『統群書類従』第二五輯下、三六一頁・三七二頁・三七五頁)、『右記』(『群書類従』第二四輯六七九頁)
- (8) 『山槐記』久寿二年正月二十二日条、治承二年十月二十五日条、『門葉記』卷一七二(『大正新脩大藏經 図像部』第二二卷五七八頁)、『吉記』治承五年六月十六日条・二十二日条、『東寺長者補任』(『統々群書類従』第二、五六二頁)、『都玉記』建久二年十一月十五日条、『大日本史料』第四編四、七〇五頁)、『孔雀經御修法記』(『統群書類従』第二五輯下、三七六頁)、『玉葉』建久四年正月三日条、建久二年八月二十五日条、建久四年二月十八日条
- (9) 『東寺長者補任』(『統々群書類従』第二、五五八頁・五六六頁)、『諸宗章疏録』(『大日本仏教全書』第一卷一六七頁)、『広隆寺供養日記』(『統群書類従』第二七輯上、三三三頁)
- (10) 『尊卑分脈』第二篇四九四頁)、『東寺長者補任』(『統々群書類従』第二、五六四頁)、『血脈類集記』(『真言宗全書』三九卷一四三頁)、『五八代記』(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』四、三三三頁)、『醍醐寺座主讓補次第』(『統群書類従』

第四輯下、五二四頁）、『表白集』（『同』第二八輯上、四五〇頁）、醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脉』（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一）、『密宗血脉鈔』（『続真言宗全書』二五卷三二六頁）。勝賢に言及した論文は数多いが、とりあえず土谷恵「中世初頭の仁和寺御流と三宝院流」（『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社、一九九八年）、西弥生「醍醐寺勝賢と「東寺」意識」（『古文書研究』七八、二〇一四年）を参照されたい。特に土谷論文所掲の「勝賢年譜」は貴重である。

- (11) 「醍醐寺座主次第」（国立歴史民俗博物館蔵、田中穰氏旧蔵典籍古文書一三四号）、『吉記』治承五年六月十六日条、『玉葉』建久二年五月十三日条・十八日条・二十四日条、『建久二年祈雨日記』（『続群書類従』第二五輯下、二八七頁・三〇四頁）、『東寺長者補任』（『続々群書類従』第二、五六一頁・五六三頁）、（建久三年）後七日御修法請僧交名（『鎌倉遺文』補遺一二二号）、『五壇法日記』（『続群書類従』第二六輯上、七七頁）

- (12) 『山槐記』元暦二年八月二十六日条、『孔雀経御修法記』（『続群書類従』第二五輯下、三七五頁）、『神宮大般若経転読記』（『同』第二六輯上、二二四頁）

- (13) 『寿永二年転法輪法記』（『続群書類従』第二六輯上、一六三頁）、『雨言雜秘記』（『同』第二五輯下、二四一頁）、『諸宗章疏録』（『大日本仏教全書』第一卷一七六頁、前掲注⑩）土谷論文

- (14) 『東寺長者補任』（『続々群書類従』第二、五六一頁・五六二頁）

- (15) 『仁和寺諸院家記』（『群書類従』第四輯七二二頁）、『仁和寺諸師年譜』（『続群書類従』第八輯上、二〇四頁）、『五代代記』（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』四、三五頁）

- (16) 海老名尚「鎌倉の寺院社会における僧位僧官」（福田豊彦編『中世の社会と武力』吉川弘文館、一九九四年）

- (17) 川合康「源平合戦の虚像を剥ぐ」（『講談社学術文庫』二〇一〇年）

- (18) 『吾妻鏡』文治五年六月二十九日条、七月十八日条

- (19) 『吾妻鏡』文治五年九月九日条、十一月三日条・七日条

- (20) 『玉葉』文治二年四月十九日条

- (21) 横内裕人「密教修法からみた治承・寿永内乱と後白河院の王権」(同『日本中世の仏教と東アジア』、初出は一九九七年)。なお、これらの祈禱を最初に取り上げたのは、上川通夫「中世聖教史料論の試み」(同『日本中世仏教史料論』吉川弘文館、二〇〇八年、初出は一九九六年)であり、木曾義仲または源頼朝の調伏を目的としたものと解している。また、中野玄三「東寺本仁王經五方諸尊像論」(同『続日本仏教美術史研究』思文閣出版、二〇〇六年)もこの祈禱に言及している。

- (22) 『覚禪鈔』(『大日本仏教全書』第四九卷一六八八頁、一六九三頁、一六九六頁)、『寿永二年転法輪法記』(『続群書類従』第二六輯上、一六三頁)

- (23) 中島俊司編『醍醐雜事記』三九三頁(醍醐寺、一九三一年)

- (24) 『覚禪鈔』(『大日本仏教全書』第四九卷一八九三頁、一八九五頁)、『百壇大威徳供等記』(『鎌倉遺文』二〇一一号)、『五八代記』(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』四、三四頁)

- (25) 中島俊司編『醍醐雜事記』三九四頁

- (26) 阿部泰郎「宝珠と王権」(『岩波講座 東洋思想』一六、一九八九年)、伊藤聡「重源と宝珠」(同『中世天照大神信仰の研究』法藏館、二〇一一年)、大橋直義「仏舍利相承説と〈家〉」(『日本文学』五二一七、二〇〇三年)、田中貴子「宇治の宝蔵」(同『外法と愛法の中世』砂子屋書房、一九九三年)

- (27) 『勝光明院宝蔵宝珠筥目録案』(『鎌倉遺文』補遺一二五号)

- (28) 『玉葉』文治元年十月十七日条・二十一日条・二十六日条、十一月三日条

- (29) 『玉葉』寿永二年閏十月十八日条、二十三日条、十二月七日条・九日条、寿永三年正月十日条・十三日条・十四日条・十六日条・二十日条

- (30) 前掲注(26)伊藤論文

- (31) 藤井恵介「俊乗房重源と権僧正勝賢」(『南都仏教』四七、一九八一年)、『東南院務次第』(『大日本仏教全書 東大寺叢書』二、一六二頁)。なお、醍醐寺には平安中期より、東密と三論宗の僧侶が存在していた(永村真「中世醍醐寺



と三論宗」〈大隅和雄編『仏法の文化史』吉川弘文館、二〇〇二年〉。元暦元年に定範が維摩会堅義を遂業したことからも分かるように、東南院に入る以前から定範は醍醐寺で三論宗を学んでいた。その実績があったため、院主就任の翌年に三会講師をつとめることができたのだ〔三会定一記〕〈大日本仏教全書 興福寺叢書 一、三三五頁〉。それゆえ、勝賢譲状の「故所譲与定範得業」也、即常住本寺而令学本宗也」とは、醍醐流の三論宗を学んできた定範に、東大寺に常住して東南院流の三論宗を学ぶよう指示したものである。唯密の勝賢に対し、定範は顕密併修の僧侶であった。

(32) 文治六年六月七日勝賢譲状案〔鎌倉遺文〕四四一号)

(33) 筒井寛秀監修『東大寺統要録』一六八頁(国書刊行会、二〇一二年)

(34) 『玉葉』建久二年六月十六日条・十七日条・二十日条、七月三日条、八月三日条。この事件に関しては、石田貞吉「鏝也と露色随詠集」(同『新古今世界と中世文学』下、北沢図書出版、一九七二年)、前掲注(31)藤井論文、五味文彦「大仏再建」(講談社、一九九五年、二〇四頁)、室賀和子「空体房鏝也の伝記上の問題」(『上田女子短期大学 学海』六、一九九〇年)、同「空体房鏝也の内面世界」(『大正大学大学院研究論集』一二一、一九九八年)を参照。なお、空体の私家集である『露色随詠集』には、空体が勝賢・九条兼実と談笑している時に詠んだ歌一首を収めている。

(35) 文治四年七月二十五日勝賢高良社施入状〔表白集〕〈続群書類従 第二八輯上、四七五頁〉、工藤敬一「高良宮造宮役と筑後の莊園公領」(『国立歴史民俗博物館研究報告』四七、一九九三年)

(36) 『玉葉』建久三年三月十三日条

(37) 『明月記』建久三年三月十六日条

(38) 土谷恵「中世初頭の醍醐寺と座主職」(同『中世寺院の社会と芸能』吉川弘文館、二〇〇一年)、角田文衛「通憲の前半生」(同『王朝の明暗』東京堂出版、一九七七年)。紀伊二位朝子は後白河の乳母のなかでも、特に力をもっていた女性である(『今鏡』第三、講談社学術文庫、上、四八〇頁)。

(39) 角田文衛「白河天皇の乳母」(同『王朝の明暗』)、秋山喜代子「養君にみる子どもの養育と後見」(『史学雑誌』一

〇二一、一九九三年など。

- (40) 『醍醐寺座主讓補次第』(『統群書類従』第四輯下、五二四頁)、『鈔第六』奥書(『大日本史料』第四編一七、二四八頁)、  
『五八代記』(『醍醐寺文化財研究所研究紀要』四、三四頁)。なお平治の乱の経緯については、元木泰雄『保元・平治  
の乱』(角川学芸出版、二〇一二年)、美川圭『後白河天皇』(ミネルヴァ書房、二〇一五年)を参看した。

- (41) 前掲注(38)土谷論文

- (42) 『野沢大血脈』(『統真言宗全書』二五卷四八頁)によれば、勝賢が重書だけをもって醍醐寺を逐電して高野山に逃れ  
たところ、乗海が「院宣」を申しうけて重書の返却を迫ったという。しかし、この記事については疑問が多い。第一  
に、勝賢が高野山に籠居していた時期は、後白河院が政治力を失っており、乗海が返却を迫るのであれば、後白河の  
「院宣」ではなく、二条天皇の綸旨・宣旨でなければならない。第二に、『同書』は勝賢が醍醐寺座主に復帰したとき、  
乗海が聖教をもたずに醍醐寺から退去しようとしたと記しており、これが前述の勝賢のエピソードと対応している。  
しかし、勝賢の座主還補は乗海の死没によるものであり、乗海の醍醐寺退去の話は歴史的事実に反する。以上から、  
乗海が「院宣」によって重書の返却を迫ったとの記事は、信頼できないと判断した。

- (43) 『百鍊抄』治承三年十一月二十日条。ちなみに、勝賢は成範・脩範の同母兄弟と特に交流が深い。成範の子である  
成賢は勝賢の嫡弟となつて三宝院流を相承したし、同じく定範は勝賢から東大寺東南院を譲られた。また、脩範は寿  
永二年(一一八三)十一月に出家して成蓮房円浄と名乗り、勝賢のもとで学んで伝法灌頂をうけている。なお、木村真  
美子「少納言入道信西の一族」(『史論』四五、一九九二年)、青木賢豪「藤原成範年譜考」(『講座平安文学論究』三、  
一九八六年、風間書房)、中村文「信西の子息達」(同『後白河院時代歌人伝の研究』笠間書院、二〇〇五年)を参照。

- (44) 『吾妻鏡』建久五年十月十三日条、十二月十五日条・十九日条・二十六日条

- (45) 建武四年十二月醍醐寺報恩院所司等訴状(『大日本古文書 醍醐寺文書』四六三号)、元亨二年四月日隆舜申状案  
(『同』三七二号)。なお、本稿では特に取り上げなかったが、勝賢の愁訴によって源頼朝が越前国牛原庄の地頭職を  
停廃している(『鎌倉遺文』二九二二号)。これまた、勝賢に対する頼朝の配慮というべきだろう。

- (46) 『百壇大威徳供等記』（『鎌倉遺文』二〇一一号）、『血脈類集記』（『真言宗全書』三九卷二二頁）、『報恩院入壇資』（『統群書類従』第二六輯上、三七四頁）、『六条八幡宮別当補任次第』（国立歴史民俗博物館蔵、田中穰氏旧蔵典籍古文書四四三号—二一）、武家祈禱勤修関係文書（『大日本古文書 醍醐寺文書』一三七号）。なお、西弥生『醍醐寺成賢と密教修法』（『日本歴史』六七六、二〇〇四年）、永村眞『醍醐寺の密教と社会』（稲垣榮三編『醍醐寺の密教と社会』山喜房佛書林、一九九一年）、林文子『報物集』に見る報恩院憲深（『同』）、永村眞『遍智院成賢の教説と聖教』（同編『醍醐寺の歴史と文化財』勉誠出版、二〇一一年）、藤井雅子『南北朝の動乱と醍醐寺』（『同』）、同『中世醍醐寺と真言密教』（勉誠出版、二〇〇八年）、関口崇史『中世寺院における所職・所領相続について』（『大正大学大学院研究論集』二二、一九九八年）などを参照。
- (47) 『吾妻鏡』文治元年十二月三十日条、文治三年正月十五日条、文治元年十二月三十日源頼朝判補任状案（『鎌倉遺文』三二二号）。なお、海老名尚・福田豊彦『田中穰氏旧蔵典籍古文書』六条八幡宮造営注文について（『国立歴史民俗博物館研究報告』四五、一九九二年）を参照。
- (48) 承元三年八月二十五日成實法印書状（『大日本古文書 醍醐寺文書』一三七六号）
- (49) 関口崇史『鎌倉幕府と醍醐寺蓮蔵院』（『鴨台史学』五、二〇〇五年）
- (50) 『血脈類集記』卷五（『真言宗全書』三九卷一〇六頁）によれば、良勝の弟子である本泉房朗澄の弟子に季嚴があり、季嚴の弟子として教嚴・証舜・良嚴の三名を挙げている。また、『同』卷六（『同』一四七頁）によれば、勸修寺寛杲大法師の弟子に「季教」があり、その弟子として教嚴・証寂・良嚴の三名を挙げている。弟子の教嚴・良嚴が一致しており、「教」と「嚴」は間違ひやすいことから、寛杲の弟子の「季教」は季嚴の誤記・誤読と判断した。
- (51) 『安祥寺流血脈図』（『東寺宝菩提院三密蔵聖教』一七三函三九号）、『血脈類集記』（『真言宗全書』三九卷一〇五頁）、醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一）、『卷数集』（『統群書類従』第二八輯上、四五頁）、『法琳寺別当補任』（『同』第四輯下、五五五頁）。なお実嚴は『安撰和歌集』に七首採録されている。
- (52) 『尊卑分脈』第一篇二〇七頁、『兵範記』仁平二年四月二十九日条、『血脈類集記』（『真言宗全書』三九卷一〇六頁・

一二一頁・一二四頁・一二五頁・一三四頁・一三七頁・一四七頁）、『孔雀經御修法記』（『続群書類従』第二五輯下、三七三頁・三七四頁・三六二頁）、安元二年三月二日肥後国鹿子木庄文書目録（『平安遺文』三七四八頁）

- (53) 『石山寺縁起』（『続群書類従』第二八輯上、一二二頁）、『弘鏡口説』（『同』第二七輯上、七九頁）、『覚洞院僧正入壇資記』（『同』第二六輯上、四〇八頁）、『範賢灌頂記』（『大日本史料』第四編一、七三九頁）、『血脈類集記』（『真言宗全書』三九卷一〇六頁）

- (54) 醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一）、『血脈類集記』（『真言宗全書』三九卷一二四頁）

- (55) 『醍醐水本法流并院家相承次第』（国立歴史民俗博物館蔵、田中穰氏旧蔵典籍古文書二七八号）、『血脈類集記』（『真言宗全書』三九卷一四三頁）、醍醐寺本『伝法灌頂師資相承血脈』（『醍醐寺文化財研究所研究紀要』一）、『五八代記』（『同』四）、『覚洞院僧正入壇資記』（『続群書類従』第二六輯上、四〇七頁）

- (56) 仁和寺本『真言伝法灌頂師資相承血脈』（名古屋大学比較人文学研究年報 仁和寺資料 第四集、四八頁）、文治四年・五年の後七日御修法は『大日本史料』第四編一、二四七頁・五二三頁、建久三年・十年・正治二年・建仁三年は後七日御修法請僧交名（東寺百合文書函）を参照。

- (57) 『醍醐寺座主次第』（奈良文化財研究所編『俊乗房重源史料集成』三二〇頁、吉川弘文館、一九六五年、二〇一五年復刊）。ここでは「法橋委厳」と記されているが、季厳の誤記である。なお、季厳は建久三年七月に蓮華王院三十供壇にも出仕している（『三井統燈記』九（『大日本仏教全書』第一一一卷二四一頁））。このほか、季厳は和歌にも堪能であった。建久二年三月と正治二年に石清水八幡宮の若宮社頭で行われた歌合に参加したし、承元三年と建暦元年には醍醐の長尾社での歌合に参列している（『玄玉和歌集』『夫木和歌抄』『若宮社歌合建久二年三月』『石清水若宮歌合正治二年』『続門葉和歌集』）。そこで将軍実朝は季厳に対し、五代集『万葉集』『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』を営送するように命じている（『明月記』建保元年十月十三日条）。なお、季厳など醍醐寺を中心とする歌壇については、辻勝美「醍醐寺と和歌」（『日本大学文学部人文科学研究紀要』四八、一九九四年）、同「中世和

歌の研究」(『國學院雜誌』九五—一一、一九九四年)、中村文「鎌倉初期東大寺歌壇の一動向」(『後白河院時代歌人伝の研究』を参照)。

- (58) 拙稿「鎌倉仏教の成立と展開」(同『鎌倉仏教と専修念仏』法藏館、二〇一七年)。京都高僧の招聘の内訳は、文治元年勝長寿院供養の公顕(寺門)、文治五年鶴岡八幡宮五重塔供養の全玄座主(代官観性、山門)、建久三年永福寺供養の公顕、建久四年永福寺阿弥陀堂供養の真円(寺門)、建久五年の永福寺薬師堂供養での勝賢(東密)である。

- (59) 拙稿「鎌倉真言派の成立―文覚・性我・走湯山―」(『京都学園大学 人間文化研究』四〇)

〔追記〕 本稿は平成三十年度科学研究費助成「鎌倉真言派の基礎的研究に基づく鎌倉幕府像の再構築」(課題番号二六三七〇七六五)の研究成果の一部である。